

2016 年度世界展開力強化事業 中南米との大学間交流プログラム（短期留学）帰国報告書

国際食料情報学部・国際農業開発学科・1年 伏見 和子

8月20日から9月4日の16日間、私はペルーに短期留学しました。このプログラムに参加した主な目的は2つです。ペルーは砂漠の広がる沿岸部のコスタ（COSTA）、アンデス山脈が連なるシエラ（SIERRA）、アマゾン川流域のセルバ（SELVA）の3つの地域に大きく分けられ、各々異なる自然や文化が存在します。その違いを肌で感じる事が第一の目的です。第二に、自分のやりたいことを見つけるきっかけにすることです。私は将来、漠然と国際協力に携わりたいと考えていました。大学に進学して専門的なことを学べる機会は増えましたが、自分のやりたいことが定まっていないため、その機会を無駄にしているように感じます。現地の学生は何か明確な目標を持っていたり、勉強に対する意識が高かったりするのではないかと思います。彼らとの交流を通して、学ぶべきことをたくさん吸収したいです。

リマ、カハマルカ、プカルパのそれぞれ違った地域で過ごした日々はどれも鮮明に覚えており、勉強になることばかりでした。3地域で学んだことや感じたことをいくつか報告します。

リマでお世話になったラ・モリーナ国立農業大学は1902年に設置され、農学や森林学、漁業、畜産などを学べる学科が8学科あります。キャンパス内は広くて似たような建物が多いので、迷ってしまいそうだと思いました。大学では私たち向けのスペイン語の授業やペルーについての講義を受けたり、いくつかの研究について話を伺ったり、施設を見学したりしました。講義の中で、ペルーはブラジルに次いで日系人の多い国だと知り、契約移民という言葉も初めて知りました。日本と遠く離れた地でペルーのことだけでなく日本についても知る機会となり、何だか不思議な気持ちでした。キャンパスには広い圃場があり、育種学を学ぶ学生一人一人に一定の面積が与えられます。そのなかで作物・植物を栽培し、生育状態などを教授が見て成績がつけられるそうです。実学主義の表れだと思いました。学生との交流では、自分たちが携わっているプロジェクトの内容やスペイン語を教えてもらったり、興味ある分野について話し合ったりしました。彼らの考え方は面白く、何かを知ること、研究することにとっても熱心だと思いました。自分のやっていることに誇りを持っており、わからないことや疑問を口にすると快く答えてくれました。また、農業検疫局 SENASA の有機農業を主に担当している方と知り合う機会があり、そのオフィスに訪れることを快諾してくださいました。短時間でしたが、ペルーの農業や食品衛生管理について話を伺うことができました。帰国日には MISTURA という食の祭典に行きました。食だけでなく、各地方の伝統衣装や踊り、音楽なども観ることができました。

カハマルカでは農大の OB・OG のお宅にホームステイさせていただきました。そこでま

ず、アンデス山脈一帯を原産とするキヌアの栽培地を訪れました。政府関連のプロジェクトが行われており、その担当者さんから話を伺うことができました。そのプロジェクトではソラマメ、キヌア、Tarwi（ザッショクノボリフジ）というマメ科植物の3種類を扱い、適正な価格でスーパーに卸しています。この3種類を栽培している理由として、健康に良い食べ物が人々には必要であり、農家が利益を十分に得られると考えたからだそうです。プロジェクトの一つとして実習を行い、栽培方法やマネジメントを学びます。脱穀時に使う機械は複数人のグループを作らないと借りることができないため、そのグループの作り方も学びます。実際に農家さんの話も聞くことができました。農業を始めるときの初期投資は政府からの寄付があり、そのおかげで今では援助を受けずにやっていけていると言っていました。また、化学肥料では上手く育てられずお金もかかるので、biofertilizer（生物肥料）を用いているそうです。ほかに、独特の文化やルールを持ったコミュニティも行きました。Porcón というところでは、そのコミュニティに属する人だけがそこに住むことができます。聖書の一節が記された看板がいくつもあり、キリスト教の教えを常に忘れないようにという意味があるそうです。別のコミュニティでは山の斜面で農業が行われており、人が住むエリアと畑の場所が遠かったです。川からの水を利用してスプリンクラーで灌水をしていました。日本では見ることのできない風景を見ることができて良かったです。また、農業だけでなくカハマルカやペルーの抱える社会問題について知ることもできました。ホームステイでお世話になった方が採掘会社で働いており、そちらに行く機会がありました。その方は会社の窓口として地域住民から寄せられる意見に対応しているそうです。カハマルカにはいくつもの違法な採掘会社が存在し、環境への影響を心配する声もあり、採掘事業に悪い印象を持つ人は少なくありません。そういった人たちに理解してもらえよう話をしたり、土地を使わせてもらう代りに発電所を作って電力を安定的に供給できるようにしたりと様々な事業に取り組んでいるそうです。違法な採掘場は危険な立地に多く、取り締まりを担当する役人も近づかないため減らないようです。私たちが行った会社は安全管理を徹底していました。また、標高が4000mに近いためか簡単な健康診断を受けてから見学が始まり、驚きました。

プカルパは日差しが強く、カハマルカとの気温差に私の体は追いつきませんでした。カムカム協会の鈴木孝幸さんにお世話になり、プカルパにあるオフィスとカムカムをはじめとした熱帯作物を栽培されている農場へ行きました。広大な農場には、日本では見たことのない作物がたくさんありました。カムカムやサチャインチの木々の大きさや試験栽培に最低10a使うなど、規模の違いに驚きました。またVACシステムを利用したピラルクの養殖も行っていました。何よりも印象的だったのは鈴木さんのお話しです。カムカム協会設立からその後の活動、波乱万丈な経験談を話してくださいました。命がけでカムカムを広め、今もその歩みを止めず進んでいく姿は、ペルーの抱える社会問題、環境問題、貧困問題の解決に欠かせない人物であると思いました。鈴木さんはペルーの歴史や文化に詳しく、地域によって異なるペルー人の性格を理解し話し方を変えているそうです。その国や住ん

でいる人々に合わせた方法を考えられていました。また、途上国を支援するといっても綺麗事だけではやっていけないのだと思いました。カムカム協会は利益を得るための事業と地域の人々のための事業をしっかりと線引きしています。目的に合わせて方策を立てることで何をやっているのか明確になり、携わっている人も行動しやすいのではないかと思います。貧しい人を支援することと利益を得るためのビジネスを同時にしようとすると、儲けることが中心となったプロジェクトが考えられ、本来第一に考えなくてはならない人々の為にならないことばかりだと思いました。支援はあくまで必要としている人のために行うことであり、単なる自己満足になってはいけないと改めて感じました。

加えて 3 地域を通して貧富の差を感じました。お菓子はどうかと愛らしく寄ってくる少女や絵を売る男性、道路に座って物乞いをする老人。食堂に入ればあの子どもには気を付けてと言われてたり、タクシーに乗れば荷物は下に降ろしておいてと言われてたり。住居の材質も異なりました。日本と同じような造りの家があるすぐ近くにはトタン屋根の家や窓枠にガラスの無い家。道路がすべて舗装されている地域もあれば砂塵が舞う地域もありました。日本では想像もつかないことがペルーの人々の当たり前なことでした。

目標達成の自己評価についてですが、ある程度達成できたと思います。第一の目標である 3 地域の違いを肌で感じる事ができ、共通することにも気づくことができました。3 地域すべてを訪れ、農業に携わっている方のお話を聞いたのが大きいと思います。実際に住んでいるからこそわかることがあり、自分で行って見たからわかることがあると感じました。また、今回のプログラムを通して自分のやりたいことを見つけるきっかけになりました。サチャインチや Tarwi、biofertilizer、適正な商品取引やマネジメントについてもっと詳しく学びたいと思いました。現地の学生との交流を通して、自分の知識不足や経験の少なさを痛感しました。1 年生の間は興味のあることについて学び、知識や経験を増やす期間として、これからの研究テーマを焦らず決めていきたいです。

今後の取り組みとして、まず自分の国について勉強しなおそうと思います。ペルーで出会った方々は自分の国を理解し、堂々と話していました。私が海外に出る機会、これからはあると思います。農大の留学生と話すときも日本について知らなければ恥ずかしいと思いました。そして語学力の向上、とりわけスペイン語の勉強に力を入れるつもりです。今回のプログラムではほぼ英語で会話し、挨拶や何か感想を言うときに簡単な形容詞をスペイン語で話ただけでした。スペイン語ができていたら、もっと現地の学生とコミュニケーションをとっていたら、専門的なことを直接聞くことができただろうと思います。滞在中にだんだんと相手が何を話しているのかわかるようになりましたが、自分が話せないことにもどかしさを感じました。スペイン語技能検定の合格や DELE の取得を目標にしていきます。また、英語で専門的なことを学べるようになりたいと思ったので、1 か月くらいの語学留学や英語で学べるプログラムを取ろうと思います。

プログラムに対する要望として、出国前に滞在スケジュールをある程度知らせてほしいです。また、ラ・モリーナ国立農業大学は国際農業研究協議グループの一つである CIP

(Centro Internacional de la Papa) や国立農業研究所 inia (Instituto Nacional de Innovacion Agraria) の本部が近くにあるので、そこを訪れる機会があったほうがより良い経験を積めると思います。

最後に、ペルー人の温かさや優しさに触れ、滞在 16 日間の不安が和らぎました。プログラムを通して出会った方々、送り出してくれた両親や友人には感謝の言葉しかありません。ありがとうございました。今回の経験を活かして、将来活躍できる人材になれるよう努力を重ねていきます。